

2025/7/6 「死への応答」 ルカ 23:44-49 交・詩 14:2-7、さ 470、せ 398(398)

ペンテコステ、弾圧記念礼拝、四重の福音強調月間、そして子どもの日・花の日礼拝と、恵みいっぱいだった6月から、いよいよ7月を迎えました。洗礼式、夏期学校、そしてバイブルキャンプ！コロナ禍前の活気が戻ってきたことを感じます。

あれから5年が過ぎ、心身の衰え？を感じて驚くところもありますが、与えられた命を、神様の御心にながらう歩みに用いていただけることを感謝しています！

生きる意味とは何か

先日、『ひとりでは死ねない～がん終末期の悲しみは愛しみへ～』という題の細井順兄の著書をたまたま書店で見つけました。細井兄はヴォーリズ記念病院ホスピス医師として、たくさんの方の死を看取ってこられた兄弟です。その貴重な経験から、人の命とは何か、生きがいとはなにか、ということを深く語っておられ、感銘を受けました。

今朝の聖書の箇所は、私たちの救い主であるイエス・キリストが十字架でついに息を引き取る場面です。私たちは、当たり前ですが生きていくことを望んでいます。そして、愛する人が一日でも長く生きていてほしいと願っています。しかし、全ての人の死亡率は100%であり、イエス様も例外ではありませんでした。自分の人生の一部とも言える存在が、この地上から別れていく時、私たちはどんな反応、応答をするのでしょうか。そしてそれは、何を教えてくれるのでしょうか。そこに湧きあがるやるせない思いを受け止める時、きっと自分の生きる意味をつかむことにもなるのではないのでしょうか。

宮沢賢治が、病弱な妹を看取ったことを謳う「永訣の朝」という詩があります。許しを乞う祈りと、感謝と、告白がそこにはあります。死は、誰も考えたくはありません。しかし、それは生きる意味を教えてくれる静かですが、大切な存在なのです。この真実に向き合うとき、イエス様の言葉の本当の意味にも、近づくことができるでしょう。

本当の幸せ

ゴルゴダの丘の場面で、イエス様の亡骸を前にして、異邦人でありながら百人隊長は、「この人は正しい人であった」と告白しました。たくさんの方の理不尽な死を見届けてきた、苦勞人であったと思います。人々も胸を打ちながら立ち去り、婦人たちは遠くで見つめていたとあります。そこに主イエスの母、マリアの姿は一際悲壮感漂うものだったでしょう。「救いの喜び」「本当の幸せ」「神の国の完成」この約束が全部ビリビリに破られてしまったようなこの場所で、百人隊長の賛美は、私たちに驚かせます。

そして、この賛美は、本当の幸せとは、肉体を超えた信仰によるものであることが、鈍い私たちの心にも響いてきます。尊い神の子ですら、残酷な十字架にかけて処刑する罪深い人間の世界にも、本当の幸せが、残されていることを語っているのです。

イエス様が犠牲となってくださったのですから、私たちの払う犠牲など、いかほどのものでしょう。「死にがいのある人生」は、本当の幸せに包まれた命なのですから。